

研究ノート

〈国家〉の再考* —カナダの実験— (5)

中 野 秀 一 郎**

まえがき

第1章 民族、国家、連邦制

(以上71号 103-114頁)

第2章 アングロ系とフランス系—カナダ国家の
誕生と展開—

(73号 87-95頁)

第3章 ケベック・ナショナリズムと分離主義

(74号 151-167頁)

第4章 2言語主義、多文化主義、そしてさらな
る多元性—理念と現実—

(75号 151-162頁)

第5章 カナダ国家の性格

おわりに

(以上本号)

20世紀は、民族の時代として幕を開けた。もちろんその起源は18世紀に遡るとしても、主権、国民、領土を基本的な構成要素とする国民国家（民族国家）が帝国主義戦争を戦い、その結果としての脱植民地化が多数の新しい「民族国家」を産み落とし、現在ではその数は200に近い。そして、カナダも、あるいは日本も、その一つであることは間違いない。他方、20世紀の幕が下りようとしている今日、こうした「国家」の存在がますます疑問視され、また実際にそれが形骸化・空洞化しつつあることも否定できない。内にあっては、それまで沈黙を強いられてきた少数民族が〈民族自決〉を主張し始めることもあろう。あるいは、かつてはその（法制的）支配に従順であった諸団体が国境を超えて平気で活動するようになる。資本、学問、情報は本来的に国籍や国境になじまな

いが、交通・通信技術の飛躍的な発展でますますその本性を露わにするようになった。その一方で、人類全体で取り組まなければならないような地球的な問題が生じ始め、その解決のためには国家を超えた協同的な取り組み、あるいは国際機関のような超国家的な仕組みが作動しなければならないという状況である。たとえば地球温暖化。もちろんこれは工業化に伴う二酸化炭素の大量の排出によるものであるが、国境や国籍とは何の関係もない人類全体のすみか、地球を危機に陥れるという類の問題である。

既に見てきたように、カナダは数ある現代国民国家の一つではあるが、十分に成熟した先進国として民主主義と福祉国家の思想に立脚しつつ、同時に連邦制という政治的枠組みを採用して歴史的・文化的背景の異なる諸民族の共存を可能にするような政治的共同体を実現しようと試みてきた。それを私は一つの〈実験〉と呼び、そこから何を学ぶべきかを模索することをこの一連の論考の課題としたのである。そこで、この作業を締めくくるに当たって、この国家の性格をどう規定するか、その歴史的な位置づけをどう確定するか、そしてそこからいかなる未来展望が可能になるかを考えてみたいと思う。

概念の検討と整理

最初に、いささか不本意であり、また本論から離れるが、諸概念の検討と整理をしておかなければならない。というのも、たとえば、カナダが多民族国家だとか、その政策に多文化主義を掲げているというような場合、その真に意味するところ

*キーワード：カナダとケベック、多文化主義、国家統合

**関西学院大学名誉教授